シグルズル・ギルフィ・マグヌソン「歴史の単数化 ─ 知のポストモダン的な状況における社会史とミクロストリア」

Sigurður Gylfi Magnússon, ""The Singularization of History": Social History and Microhistory within the Postmodern State of Knowledge", *Journal of Social History*, 36-3, 2003, pp. 701-735.

紹介

マグヌソンはアイスランドの歴史家であり、レイキャビク・アカデミーにあるミクロストリア研究所(The Center for Microhistorical Research)の創始者である。「歴史の単数化」(the singularization of history)として知られる彼の方法をはじめて紹介したのが同論文になる。

1. 「ヤンキー・ドゥードゥル・ダンディ」Yankee doodle dandy (pp. 701-702)

○論文の目的1

- ・社会史の主な目的は、普通の人々を彼ら自身の条件で歴史の主体にすること(下からの歴史)であった。ところが、社会史はこの目的の達成に成功していない。この失敗についての分析を試みる²。
- ・今日、学問の世界では理論の地位に総じて不満が存在する。この認識を明確にし、さら に歴史の実践によって投げかけられた難問に対する可能な解決策を提示する。

2. 「社会史とはなにか?」What is social history? (pp. 702-704)

○現在の社会史の状況

・ユルゲン・コッカによる社会史の定義

「社会史によってわたしが意味しているのは、一方で、歴史研究の下位分野であり、それは主に社会の構造、過程、経験を扱う。例えば、階級や階層、民族集団や宗教集団、移民や家族、ビジネス構造や起業家精神、流動性、ジェンダー関係、都市化、地方生活のパターン・・・。他方で、社会史が意味しているのは社会史的な観点からの一般史へのアプローチである。社会史はこの意味において、歴史的な現実のすべての領域を、社会

^{1 ○}で表記した小見出しはレポート作者が付した。

² 著者が直接言及しているのは、*Journal of Social History* と、特にその 1996〔1995〕年の特集号「社会史とアメリカの政治状況 — 問題と戦略」("Social History and the American Political Climate: Problems and Strategies") である。

の構造、過程、経験とさまざまな仕方で結びつけることによって扱う | 3。

- ➡注目すべきは、コッカやその他多くの社会史家が、彼らの扱う主題を一般史と結合さ せていること。
- ・社会史が本来目指していたのは単数の焦点しか持たない歴史への反対であった。ところ が、社会史の隆盛とともに「ストーリーライン」が断片化してしまい、新たに統合する 必要が生じた。
- ・社会史家はかつての大きな物語の新しいバージョンを求めており、多くの学者がメタ・ ナラティブや大きな物語、一般史、マクロな歴史について語っている。
 - ➡著者によれば、社会史は過去数十年間ですっかり状況が一巡してしまった。しかも、 伝統的な政治史と同じ罠にはまり、研究はメタ・ナラティブによって与えられた文脈 の中に位置づけるべきだとされている。

3. 「口笛を吹いて墓地を通り過ぎる」Whistling past the graveyard (pp. 704-709)

○数量的方法の隆盛

- ・著者が大学院生の頃(1980-1990年代初頭)、アメリカでは数量的方法を重視する研究が 隆盛。これには次の二つの影響があった。
 - ①フランスのアナール学派の影響
 - ②アメリカの社会科学の影響
 - ➡歴史が「真の科学」になりつつあるという楽観主義があった。

○数量的方法への批判

- ・歴史を科学にするための究極の道具として数量的方法を受け入れることは、著者にとっ て不本意に感じられた。
- ・1980年代には、歴史を科学へ変えようとする試みに対して力強い応答が展開された。
- ・ジャック・ルヴェルによれば、〔フランスにおいては〕70年代末から80年代初頭にか けてフランス型の社会史が危機に陥った。これは皮肉にも〔数量的方法〕が勝利を収め るかに見えた時期であった5。著者によれば、これと同じ状況が80年代末のアメリカに 広がっていた。

³ Jürgen Kocka, "What is Leftiest About Social History Today?", Journal of Social History, 29, 1996, p. 67.

⁴ cf. The American Historical Review の特集号 (1989)、Central European History の特集号 (1989)。

⁵ Jacques Revel, "Microanalysis and the Construction of the Social", Jacques Revel and Lynn Hunt (eds.), Histories: French Constructions of the Past, The New Press, 1995, p. 494. 同論文のレビュ ーも参照。

○文化論的転回の登場

- ・文学史家、哲学者、文化人類学者たちはこれまで以上に文化の影響について考え始めていた。歴史学もこうした変化から影響を受け、新しい方向に少しずつ変化。歴史学の主題は文化分析の方向にシフトし始めた。
- ・こうした変化に続いて、ミシェル・フーコーやジャック・デリダらの思想からポスト構造主義の強力な影響を受ける歴史家が現れ始めた。1980年代末から 1990年代初頭にかけて、多くの研究者は脱構築の手法を分析に応用した。
- ・ポスト構造主義が歴史学における「言語論的転回」の触媒となり、ポストモダンの考え 方が歴史家(特に若い世代)に著しい影響を与えた。
- ・こうした新しい思想は社会科学の実践に関する議論に広範な影響を与え、それを採用する人と拒絶する人との間に大きな緊張と反発を生みだした。
 - →文化論的転回により多くの社会史家に強いられた方法論的、認識論的ジレンマは、ヴィクトリア・E・ボネル、リン・ハント(編)『文化論的転回を越えて』 6の序文にはっきり示されている。

○文化論的転回の失敗

- ・ボネルとハントによれば、文化論的転回のもとで社会史家や社会科学者の著作に現れた 考え方を特徴づけているのは、次の五つの要素である。
 - ①「社会的なるもの」(the social)の地位についての問い
 - ②文化を象徴、言語、表象体系として描くことによって高められた関心
 - ③不可避なものに見える方法論的、認識論的ジレンマ
 - ④説明的パラダイムの崩壊
 - ⑤カルチュラルスタディーズの登場を含むディシプリンの再編成
 - ➡著者によれば、こうした分析は文化論的転回の背後にあるイデオロギーの主要な特徴を見事に破壊してしまっている。
- ・ボネルとハントは、「文化論的転回が説明的パラダイムの崩壊の原因か、それとも結果 か」という議論に対して、以下のように回答した。

「文化論的転回は崩壊の感覚を強化しただけだった。実証主義やマルクス主義に刺激 された研究は、ある程度自重によって崩壊したのである。明らかになったことが増え ていくにつれて、その知識を既存のカテゴリーや理論に統合することは困難となる。 知識の拡大そのものが、ディシプリン内部とディシプリン間において、統一よりも断

⁶ Victoria E. Bonnell and Lynn Hunt, "Introduction", *Beyond the Cultural Turn*, University of California Press, 1999, pp. 1-32.

片化を不可避的に強めたのである」?。

- ⇒ボネルとハントは、文化論的転回の重要さを最小化して、それがディシプリンの基盤に対する挑戦ではなく、自然な発展と変化のコースに過ぎないと主張している。
- ・このようにして、文化論的転回の影響のもとでおこなわれた研究でさえも、真に離陸することに失敗してしまった。このことは、社会史が直面したジレンマに対するもっとも効果的な応答であったミクロストリアに目を向けるとさらにはっきりする。

4. 「ミクロストリアのアプローチ」The microhistorical approach (pp. 709-712)

- ○ミクロストリアは以下のような特徴をもつ
 - ・ミクロストリアが批判したのは、大規模な数量的研究が個人のレベルにおける現実を歪めていることだった。
 - ・観察規模を縮小することで個別の諸関係の複雑な機能を明るみに出す。
 - ・研究の焦点は、数量的方法の適用によって見出される平均的な個人ではなく、平均から 外れた(outliers)個人である。これは「正規なる例外」と呼ばれる。
 - ・「正規なる例外」の発想
 - ある人々は、社会のある部分においては、わからない、変わっている、危険でさえある と見なされているかもしれない。ところが、そうした人々であっても、他の集団におい ては、注目の中心にあって日常の出来事の中で完全に受け入れられているかもしれな いのである。
 - ・ミクロストリアで扱われる事例のほぼすべては、当局に注目されたために文書化された もの。規範的システムの矛盾に注目する⁸。
 - ・分析ツールや研究方法としてナラティブに注目し、結論に到達した過程を示すことで、 研究者の解釈に潜む欠点や言説の主観的な性質を提示する。
 - → これらの特徴は、過去数十年の間に実践されたミクロストリアのほんの少数の構成 要素に過ぎない。

○ミクロストリアの問題点

- ・ミクロストリアのイデオロギーには社会史からの明確な方向転換が内在していたが、研 究者たちはむしろミクロストリアを社会史の古い方法を補助するものと見なした。
- ・文化や個人の発見はミクロストリアの歴史家に大きな影響を与えたが、彼らはより大き な全体とのつながりから解放されて、自分の二本の足で立つことができると宣言する

⁷ ibid., p. 10.

⁸ この点に関してはレビュー(Giovanni Levi, 2012)を参照。

自信には欠けていた。

- ・イッガースによれば、「わたしたちが見てきたのは、イタリアとドイツにおけるミクロストリアの歴史家たちが、ローカルに注目しているにも関わらず、より広い歴史的、政治的な文脈の視点をけっして失わなかったことである。実際、彼らが信じていたのは、「正常」とは異なるローカルに注目することで一般化を検証することができるということだった。彼らがどれだけ熱心にマルクス的、ウェーバー的、ロストウ的な近代世界の変容という概念に挑戦しても、近代化の観念から逃れることはできなかった。いまやそれは、ローカルヒストリーのミクロな規模を破る破壊的な力と見なされているのである」。。
- ・ミクロストリアにせよ、文化論的転回にせよ、それらが歴史学の伝統的な研究方法に与 えた影響は著しく小さいものだった。ミクロストリアの歴史家には、イニシアチブや確 信が欠けていたために、今までのところ現代の歴史学に重要な影響を与えていない。
 - ➡著者によれば、これは非常に残念な事態。ミクロストリアのイデオロギーを額面通りに受け取るならば、多くのものを与えてくれる。

5. 「ミクロストリアの二つの特徴的な方法:社会的と文化的」Two distinct methods of microhistory: social and cultural (pp. 712-716)

○二つのタイプのミクロストリア

- ・イタリアのミクロストリアの歴史家たちの間には方法とイデオロギーに違いがあった。
- ・ジョヴァンニ・レヴィとジャンナ・ポマータがミクロストリアの異なるタイプの代表。 単純化の危険はあるが、レヴィのグループは社会史の伝統的な形態に忠実で社会科学 に強く傾いている。一方、ポマータのグループは「新しい文化史」を代表。
- ・ポマータによればミクロストリアには次の二つの極がある。
 - ①社会科学の方法を用いて世界についての理解を深める立場。つまり、理論やマスター・ナラティブの助けを借りて、歴史的な発展を研究する人たち。〔社会的〕
 - ② 「芸術作品に匹敵するような活き活きとした鮮烈なビジョンを持ちながら、歴史には、 もっとも厳格な仕事の基準を完全に満たすような輝かしい前途があると」信じる人 たち。〔文化的〕
 - →ポマータによれば、*Quaderni Storici* 誌においてこの両派閥間の争いがあった。この 争いは社会史的アプローチの勝利で終わり、「文化的ミクロストリア」が絶えず批判 にさらされることに。

⁹ Georg G. Iggers, *Historiography in the Twentieth Century: from Scientific Objectivity to the Postmodern Challenge*, Hanover, NH, 1997, p. 139.

- ・社会史的なバイアスをもつミクロストリアの歴史家は、伝統的な社会史と強調点こそ違 うが、大きなシステムに焦点を当てる。
- ・レヴィのタイプのアプローチに含まれる問題は、研究とその結論をメタ・ナラティブに のみ向けがちがあること。
 - →多くの点で、レヴィは社会科学の方法を信頼するアメリカの歴史家の伝統的アプローチに近い。たとえば、チャールズ・ティリーである。

○チャールズ・ティリーとレヴィのアプローチの共通点

- ・ティリーによれば、大きなシステムを扱うのに用いる研究の道具では、閉じた諸集団や 諸個人の内面に生じる考えを扱うことはできない。この場合、ミクロとマクロは両立不 可能であるために、典型的な諸個人の経験を除けば、いかなる歴史も不可能であるか、 ささいなものとならざるを得ない。
- ・大きな単位と小さな単位の両方に同時に接近する方法は、さまざまなタイプの人間の相 互作用を調査することである。こうしたアプローチをティリーは「関係的実在論」 (relational realism)と呼ぶ。
- ・ところが、ティリーが常に強調しているのは大きな単位(パトロン・クライアント関係) だった。彼によれば、わたしたちは社会の構造の内部で密接に結びあわされており、わ たしたちが有していると考える移動の自由は、つねにこの構造の枠組みと各個人に与 えられた機会によってつねに制限されている。したがって、個人の経験はそれ自体のみ では説明されない。大きなシステムという文脈の中に入れられたときにはじめて理解 可能となるのである。
 - →このように、レヴィもティリーも共に社会構造の意義を信頼し、メタ・ナラティブを 受容している。

6. 「近代化 — 単数化」Modernization-singularization (pp. 716-724)

○メタ・ナラティブの存続

- ・ハントやポマータのような研究者でさえも、歴史家はメタ・ナラティブに依拠する必要 があると主張していた。調整モデルとしては近代化理論が提示される。大多数の歴史家 の考えでは、メタ・ナラティブの助けがなければ過去の時間を再構築することは不可能。
- ・スケールの縮小を望んだミクロストリアの歴史家たちでさえも、歴史研究においてメ タ・ナラティブが中心を占めるのを拒否しなかった。
- ・ハントによれば、近代の進展に疑問を呈する人たちは少しずれている。例えば、今日の 女性の地位とかつての女性の地位はまったく同じではないのに、フェミニスト・スタディーズに関して近代の進展を疑うような人たちがいる。だが、過去数百年にわたってジ

ェンダーの地位にポジティブな発展があったことを見逃すことはできない。言い換えれば、近代化という概念を使うのはまだ十分に正当であり、学者はこの指標の内部で研究をおこなうべきである。「近代のほうが良い」「近代に先行するものは、定義からして、より悪い」¹⁰。

- →著者によれば、これはきわめて異常な立場。近代化理論のようなメタ・ナラティブは、 それがどのようなものであれ、学問の世界において研究の伝統と結びついた「構成概 念」(constructs)に過ぎない。こうした構成概念は、学者が自らの研究の主題を操作し、 あらかじめ考えていた結果に適合させるための手段となる。
- ・ミクロストリアの熱心な徒であるジャック・ルヴェルも、メタ・ナラティブとのつながりを拒否しない。ルヴェルによれば、「ミクロストリアのアプローチは、新しい、より複雑な、より柔軟な変数を導入することによって社会分析を豊かにしてくれる。しかしながら、このような方法論的個人主義には限界が存在する。なぜなら、わたしたちは社会的存在、あるいはむしろ集合的経験に関して、それらを形成しそれらの機能を統御している諸規則を発見しようとつねに試みているからである」¹¹。

○ミクロとマクロの接続は不可能

- ・メタ・ナラティブは、すべてを包括するイメージや、出来事の連鎖(始めと終わりがあって、部分間に明白なつながりがあるような)を受け入れるように強制する。ところが、人生を特徴づけているのは終わりのない矛盾や気まぐれで偶発的な出来事であって、これらはメタ・ナラティブによって与えられる準拠枠の内部では説明不可能である。
- ・マクロな観点はメタ・ナラティブと結びつくことなしには不可能。メタ・ナラティブは マクロな歴史のアプローチを自動的に導いてしまう。
- ・メタ・ナラティブは、主題の近くで考え、歴史に関して自由に考えるあらゆるオリジナルな方法を不可能にする。マクロの歴史は、ミクロストリアが発見したものと結びつくと、その成果を支配し、ミクロストリア的なアプローチの重要性を最小化してしまう。

○著者の提案 — 「歴史の単数化」(the singularization of history)

- ・メタ・ナラティブは研究のパラダイムであって、パラダイムそのものは研究の直接の題 材ではない。
- ・メタ・ナラティブを用いる場合よりも、過去についての知識を与えてくれるような仕方

¹⁰ Lynn Hunt, "The Challenge of Gender: Deconstruction of Categories and Reconstruction of Narratives in Gender History", in Hans Medick and Anne-Charlotte Trepp (eds.), *Geschlechtergeschichte und Allgemeine Geschichte: Herausforderungen und Perspektiven*, (Göttingen, 1998), p. 83.

¹¹ Jacques Revel, 1995, p. 498.

で小さな単位を扱うことは不可能なのだろうか。

- →「歴史の単数化」によって可能となる。
- ・「歴史の単数化」は、調査する出来事や現象の内側に目を向け、細部におけるすべての 側面に注目し、そうした出来事や現象が有するニュアンスを明るみに出す。研究の焦点 はつねに題材の近くに置かれ、その題材にのみ固定されている。
- ・この方法は、題材に結びついたあらゆる断片をきわめて綿密に調査し、素材に直接関係 するあらゆる可能な解釈手段を考慮する。
- ・可能な解釈手段の一つがメタ・ナラティブによってもたらされる可能性は排除しない。 しかしながら、メタ・ナラティブは素材に何らかの方法で結びついている必要がある。
- ・ミクロな研究は、学問的な文脈を考慮した準拠枠に基づいており、このこと自体は避けることができない。
- ・しかしながら、メタ・ナラティブは前もって考えられた観点からではなく、題材自体の 状況に応じて検証されなければならない。
 - →「歴史の単数化」は、まず何よりも歴史がその固有の題材を、それらに固有の論理的、 文化的文脈において研究することを可能にし、「人工の」イデオロギー的なメタ・ナ ラティブから切り離される方法を探す。

○研究の「歴史化」(historicalization)

- ・「単数化」(singularization)の精神でおこなわれた研究を、他の手法でおこなわれた研究と比較することは可能である。その場合、研究者は厳しい制限を課すことが重要となる。その手続きを著者は「歴史化」と呼び、それは次の三点からなる。
 - ①一つの研究がもつ価値をそれ独自の条件において判断する。
 - ②そうした研究を、同じ分野の他の研究と比較する。
 - ③そうした研究を、より広い文脈の中に位置づける。この文脈は、メタ・ナラティブを 通して構築された諸社会の発展に関する一般的な諸観念からなる(③のプロセスはも っとも重要性が低い)。
 - →「歴史化」は「単数化」が学問の世界の内部で実践されるための処方箋。研究をカテゴリー化することを可能にしてくれる。
- ・「歴史の単数化」は、歴史をただの逸話好きの古遺物趣味に還元しているわけではない。
 - ⇒むしろ、歴史家は重要だと考える問いを解決するために、あらゆる方法論的なツール を利用するべきである。しかしながら、結論をアドホックな文脈に置こうとする試み は捨てなければならない。
- ・ではこうした断片化にはどのような価値を見出すことができるのか。

先端課題研究 19 文献レビュー(歴史学) 一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程 鈴木 良和

- →こうした過去の断片や証言は、限られた生の領域に取り組む機会を与えてくれる。この領域は、範囲が限定されているにも関わらず複雑で色彩が豊かであって、生の多様さを浮き彫りにし、限られた知識しかない領域に関して残されたあらゆる手がかりを理解する助けとなる。
- ・こうしたアプローチは文化論的転回と論理的に連続している。社会史には何も問題がないかのようにふるまうのをやめて、文化論的転回から多くを学ぶべきである。